



発行者 島根県健康福祉部  
医療政策課医師確保対策室

### 今回の紙面

- ◆地域医療最前線 NO.78 「地域医療の再構築」《大田市病院事業管理者 西尾 祐二》
- ◆専攻医のページ 「高齢化の進む町・津和野での訪問診療」《津和野共存病院専攻医 鬼山 佳祐》
- ◆看護師さんのページ NO.56 「島の医療はともに生きること」  
《海士町国民健康保険海士診療所看護師長 澤井 千波》
- ◆臨床検査技師さんのページ 「医療現場における『検査の匠』」  
《国立病院機構浜田医療センター 副臨床検査技師長 中藤 太一》
- ◆事務長さんのページ 「『総合』をキーワードに〜小さなまちの魅力〜」《飯南町立飯南病院事務長 高橋 克裕》
- ◆編集後記



## 地域医療 最前線

No.78

### 地域医療の再構築

大田市病院事業管理者 西尾 祐二



今年大田  
市立病院  
は新病院  
をオープン  
しました。  
339床か  
229床へ  
大幅にサ  
イゾダウン、急性期+回復期医療を  
担う病院として再スタートしました。  
大田二次医療圏の人口は、1999  
年の旧大田市立病院発足時には7万  
人を超えていましたが、現在は5万  
人をわずかに超える程度です。この  
20年で人口は2万人減少、診療所は  
半減しました。圏域の医師不足は慢  
性化していますが、当院ではここ  
きて徐々に医師数が増え、現在では  
ほぼピーク時の数字に戻っていま  
す。長年の懸案であった整形外科医  
も着任し、所要なすべての診療科で  
常勤化も実現しました。研修医も増  
え、現在常勤医不在の診療科からあ  
らたに常勤医派遣のオファーも届く  
ようになり、病院の魅力がアップし  
たと感じています。誠にうれしい限  
りであり、ご尽力いただいたすべて  
の皆さんに感謝申し上げます。しか

し、いざ新病院がスタートしてみ  
ると、集聚力や収益性が高まると期待  
していましたが、現在のところ、コ  
ロナの影響もあるとはいえ、病床の  
利用率は上がらず、収益も昨年並み  
と赤字基調を抜け出ていません。  
平成13-14年では医師数がほぼ同じ  
であった当時は、病院は経常赤字を  
出し、月当たりの報酬額も今より多  
かったです。圏域人口の減少に加え、  
病院機能分化が進む中、車で40分圏  
内に500床規模の病院が複数あれ  
ば、急性期医療のニーズは相対的に  
減少しているのかもしれない。し  
ばらくは、コロナの影響も考慮しつ  
つ、地元に着着した病院として、対  
応可能な医療をしっかり実践してい  
くことで再び地域の信頼を高めてい  
きたいと考えています。  
受療患者のほぼ8割を65歳以上が  
占めています。今やどこでも珍しい  
ことではありませんが、入院患者の  
平均年齢も  
年々上がっ  
ているよう  
に感じてい  
ます。高齢  
者の多くは  
複数の疾患  
を有し、疾  
病構造はよ  
り複雑化し  
ています。  
全科におい  
て専門医を  
確保できな  
い地域の病



大田市立病院

院では、総合診療医のニーズは高く  
なっています。また、専門医におい  
ても、総合的診療対応力がなければ  
専門医療の遂行が困難になってきて  
います。地域で働く専門医には、高  
度医療を担う病院の専門医とは違う  
ハードさがあると感じています。専  
門領域の他に総合診療能力を具備す  
るか、総合医のサポートが受けられ  
る体制が必要となると思います。病  
院総合医は地域医療遂行のキープ  
レーヤーであり、益々重要度が増す  
ことは間違いありません。養成が急  
がれるところ です。



玄関



ロビー

圏域から診療所が大きく減少して  
います。これは後継者の問題や医師  
の都市集中もさることながら、民業  
としての地域医療が成り立たなく  
なっている状況を反映しています。  
民業が撤退した後、残された住民に、  
だれがどのように医療を提供してい  
くのか選択肢は多くありません。何  
らかの政策的な医療対策なくして問  
題解決は困難に見えます。コロナ禍  
の中、リモート診療やAI活用によ  
る遠隔診療の診療手法も普及しつづ  
あり、当地でも活用を模索してい

たいと考えていますが、一方で高齢者、認知症患者も多く抱えるこの地域で、どの程度の住民がその恩恵に与れるかは疑問です。また、それによる診察ですべてをカバーすることは出来ず、診察や検査も含め診療を提供するには限界があります。大田市立病院は、本年度から診療所への出張診療も開始予定です。大田総合医療センターの後期研修プログラムも動かしつつ、家庭医療と地域医療確保を狙うものですが、大田市のサポートも頂きながら、大田市と共に住民の生活、生命を守る取り組みとして、自治体病院の使命として取り組んでいくことにしています。

以上とりとめもなく、地域医療についてのべてみました。これからの地域医療について明確な答えは見つけられてはいませんが、一つだけ言えることは、過去の成功例は参考にならないということです。未来を見つめ、医療経済もしっかりと担保しながら医療体制を再構築することが必要です。自治体病院の役割は更に、複雑多様化していきます。覚悟を持って臨まなければならぬと考えています。

## 専攻医のページ

### 高齢化の進む町・津和野での訪問診療

津和野共存病院専攻医

鬼山 佳祐

令和2年4月に津和野共存病院内

科に赴任いたしました内科専攻医の鬼山と申します。この度は「島根の地域医療」への寄稿の機会を与えて頂き、関係各位に御礼申し上げます。

私は平成29年3月に島根大学医学部医学科を卒業後、令和2年3月まで福岡県の病院で研鑽を積み、この度縁あって津和野共存病院へ赴任することとなりました。学生実習で二度津和野町を訪れたことがあり、病院の雰囲気の良さはもちろんのこと、「山陰の小京都」と呼ばれるように、かつての城下町の佇まいをそのまま残した美しい町並みに感激し、いつか勤務できたらと心待ちにしておりました。新型コロナウイルス感染症の影響で、思い描いていた新生活のスタートとはなりませんでしたが、地域の皆様のお役に立てるよう日々の診療に励んでおります。

津和野町は、島根県の西端に位置し、県庁所在地の松江市より約200km離れた場所にあります。人口は約



診察風景

7,000人で、高齢化率が約49%、我が国の高齢化率(28.4%(2019年9月15日時点))と比較しますと、津和野町の高齢化率がいかに高いかがわかります。日本の将来推計人口(平成29年推計)では、2065年の日本の高齢化率は38.4%であり、45年後よりさらに先の日本社会のモデルケースが今の津和野町だと思っております。

前置きが長くなりましたが、私が津和野共存病院に赴任して、早4ヶ月が経とうとしております。様々な経験をさせて頂いておりますが、特に楽しく、またやりがいのある仕事は訪問診療です。病院に通う交通手段がない方や独居の方、自宅での療養を希望されている寝たきりの方など、病院に定期受診することが難しい患者さんのご自宅を訪問し、元気に過ごして頂けるように健康管理を行っております。治療中の疾患はもろること、家庭状況なども多様であるため、その方らしい生活を送って頂けるように支えていく必要があります。身体診察で異常がないかを確認するだけでなく、自宅の住環境が患者さんにとって快適かどうかでも確認しています。例えば今の季節であれば、熱中症の発症リスクが高いため、エアコンや扇風機などの冷房機器に関して適切な使用方法を指導したり、室温設定まで行ったりすることもあります。日常生活を観察することで、予測されるリスクを事前に把握できるため、疾患の発症を防ぐことが可能です。以上の

理由より、私は訪問診療に対して非常にやりがいを感じますし、毎月患者さんの元気な姿や笑顔を見られることが何よりの楽しみで。

最後になりますが、これからも津和野町の地域の方の力になれるように日々努力し、ここでしか学ぶことができない大切なことをしっかりと学んでいきたいと思っております。

## 看護師さんのページ No.56

### 島の医療はともじ生きると

海士町国民健康保険海士診療所

看護師長 澤井 千波

私たちの勤務する海士診療所は隠岐諸島で3番目に大きな島「中ノ島」にあります。実際には小さな島であり、島全体が海士町、人口は約2,200人です。本土への交通手段は主としてフェリーで、3時間半かかります。入院施設はなく、入院の必要なケースなどは船舶またはヘリコプターでの搬送になります。

そんな島唯一の診療所ですが、血液検査、心電図、レントゲン、超音波装置、胃内視鏡のほかCTを整備し、内科の一般的な医療を行っています。近年では本土の医療機関の協力により、眼科、整形外科、精神科の専門外来が定期的に開設されています。

診療所では、医師2名、看護師8名、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士各1名のほか、事務職6名体制で一丸となって診療に取り組んでいます。

また、「ともに生きる」「みんなで一緒に見る」「患者様とその家族に寄り添い可能な限り望みを叶える」という精神のもと、在宅医療、緩和ケアにも取り組んでいます。

他施設からの多職種を加えた在宅緩和ケアチームを編成し、個々のケースに合ったプランニングを行っています。そのうえで「望む最期」が迎えられる努力をしています。

多岐にわたる疾患に対しての看護は貴重な経験である反面、多くの知識を必要としますので、常勤医師の協力や、看護師自らが講師となり定期的に院内研修会を開催し、学んでいます。ときには他施設の職員にも参加を求め、知識を深めるための学ぶ機会を提供しています。島外の研修会には移動時間や職員不足の関係から、参加が出来ないこともありましたが、参加した場合は院内で講師となり研修会を開催し、参加できなかった看護師の学びにつなげています。



スタッフの皆さん

診療所は唯一の医療機関であるため、予防医療としての保健活動との関わりもあります。保健師とともに、住民の健康維持が目的である糖尿病健診の機会が年1回あります。この事業は糖尿病専門医、神経内科医、眼科医の診察や、管理栄養士による栄養・生活指導が個別に行われます。

このように、日々患者様の生活と深い関わりを持ちながらの看護活動であるため、在宅や施設、通所サービス利用時の他職種との情報共有が不可欠となります。そのため、電話やFAXでの情報交換に留まらず、ネット回線を用いてのタイムリーな情報の共有を行っています。

小さな地域、小さな診療所だからこそ成し得ることを最大限活かした看護を行っています。「ないものはない」、これが私たち海士町のスローガンであり、この精神を医療の面でも活かし、島の住民として一緒に生活を送り、笑顔を忘れず看護を提供していきたいと考えています。



## 医療現場における「検査の匠」

国立病院機構 浜田医療センター

副臨床検査技師長 中藤 太一

国内での新型コロナウイルス（COVID-19）感染は拡大し、「重大局面」を迎えつつも未だ収束の見通しすら立たず、医療現場の危機的な

状況が盛んに報道されています。安倍晋三首相が「全国各地の医師、看護師、看護助手、病院スタッフ、クラスターの追跡調査等に携わる専門家や保健所職員、臨床検査技師の皆さんに、日本国民を代表して、心より感謝申し上げます」と謝意表明されたのも記憶に新しいのではないのでしょうか。

臨床検査技師は、医師や看護師、他の医療技術職に比べると一般の認識も低く患者様と直接かかわる機会も少ない職種ですが、医師の指示のもとに、検体検査と生体検査（生理機能検査）を行う、検査のスペシャリストです。新型コロナウイルスの影響で、一気に注目を浴びたPCR（Polymerase Chain Reaction）、この検査は鼻や咽頭の細胞や唾液を採取して、微量の病原体を高感度で検出することができます。この検査は、細菌に比べ非常に小さくそのままでは抜いづらい為、遺伝子を増幅させて検出する機器を用いて検査を行います。PCR検査については、医師が必要と認めた場合には確実に実施されることが重要であり、検査件数増加の為、更なる検査体制の整備が急務となっていることから、臨床検査技師の需要は急激に高まっています。医療の進歩や分業化により、臨床検査技師が取り扱う検査対象はますます広くなっています。近年では「病気の予防」「早期発見、早期治療」「再発防止の定期検査」といった予防医学や健康増進

などへの意識も根付いてきました。そうした背景から、臨床検査技師には病気の早期発見に有効な健康診断や人間ドックなど、多くの場面で更なる活躍が期待されています。

2019年は、検体検査室における精度管理体制について大きく注目をされました。法の改正に伴い、医療機関が自ら検体検査を行う場合には、施設の管理組織等について厚生労働省令で定める基準に適合させる必要が生じました。そこで測定標準作業書、検査機器保守管理・標準作業日誌、その他各種作業書類の改定を行いました。業務が増えたにもかかわらず、すぐに所定の時間内に仕事を終えることができるようになりました。これもスタッフのや



スタッフの皆さん

る気と、チームワークの賜だと思っ  
ています。また新たに外来採血業務  
が昨年6月から開始され、検査で培っ  
た知識・技術を備えたスタッフを処  
置室に送り出しています。検体採取  
から検査まで携わることにより、ス  
タッフの意識も大きく変わりました。  
処置室からの問合わせ件数も大幅に  
減少する事が出来ました。患者様の  
利便性の向上に寄与するための活動  
を今後も継続していきたいと考えて  
おります。

私たち臨床検査技師は、医師が診  
断や治療方針を決定する為に、縁の  
下の力持ちとして必要な情報を細分  
化し多方面から分析・解析し提供し  
ていきます。今後も各部署における  
専門性を高くし、当検査科の目標で  
もある「迅速且つ高い精度で正確に」  
を達成できるように、一層研鑽に努め  
てまいります。

## 事務長さんのページ

### 「総合」をキーワードに 小さなまちの魅力

飯南町立飯南病院

事務長 高橋 克裕

「つながり」「こども」「しごと」「定  
住」の4つをテーマとしてまちづく  
りに取り組む飯南町。飯南病院はそ  
の飯南町が開設、運営する公立病院  
です。人口4,800人、高齢化率44%、  
病床数は一般病床48床、文字通り小  
さなまちの小さな病院で、常勤医師

は総合医5名・歯科医師1名です。

医療はまちづくりを充実させるた  
めの重要な要素の一つとして位置付  
けられており、飯南病院は、中山間  
地域、不採算地域におけるこのまち  
で、直接的な医療サービスの提供は  
もろろんですが、医療機関としての  
存在や地域医療に対する責務を積極  
的に発信することで、地域の皆さん  
が安心して働き、暮らしていけるま  
ちづくりに関わり、魅力的な「まち」  
の機能の充実にも取り組んでいます。

昨年末には、町内唯一の開業医院  
が閉院され、医科の医療機関は、飯  
南病院と、同じく町が開設する3ヶ  
所の診療所のみとなり、その役割が  
一層大きくなっています。

3カ所の診療所には医師を含めて  
職員は常駐せず、診療は病院から派  
遣された医師と医療従事者等による  
「飯南版ブロック制」ともいえる仕組  
みで行われています。4つの医療機  
関は一体的に管理され、効率的な運  
営がなされています。

この小さな病院で、住民が求める  
充実した医療サービスの提供できる  
よう掲げているのが「総合」という  
キーワードです。医師を中心とした  
多職種のスタッフが事務職員も含め  
て特定の分野のみならず、幅広い役  
割を共有して取り組んでいく「総合  
マインド」を常に意識し業務にあたっ  
ています。今後「総合マインド」は  
行政全体、まち全体に浸透してい  
くことを期待しています。

カルテを開かなくても名前がわか  
るほどの小さなまちにおいて、総合

力によって高められた機動力は、そ  
のまま医療サービス、住民サービス  
に直結します。毎月2回、病院医局  
を会場に行われる地域ケア会議では、  
多施設、多職種が集まり、ケースご  
とに時間をかけて情報交換され、す  
ぐさま診療や療養に活かされています。  
昨年末に開業医院の閉院が決まっ  
た地域で行なわれた医療座談会では、  
「病院の先生方に負担は掛けられな  
い。自分たちが飯南病院へ通う」と  
診療所の新設は求められませんでした。  
町もその声に応え、閉院ととも  
に町営バスのダイヤを変更し対応し  
ました。このような一体感とスピー  
ディーな展開は、まさに小さなまち、  
小さな組織の醍醐味ではないでしょ  
うか。

飯南病院を訪れたことのない方か  
らは、「山奥で行くのが大変そう」と  
いったような声も聞かれますが、車  
で松江市から約60分、出雲市から約  
50分、広島県三次市から約50分の位  
置にあり、意外と短時間で来ること  
ができます。約100名いる職員の  
うち、10名程度が松江市、出雲市な  
どから通っており、渋滞のない通勤  
時間は、プライベートと仕事との丁  
度良いデッドセクションとなってい  
るようです。病院に研修や実習で訪  
れる方にも訪問診療や訪問看護以外  
に、森林セラピーやしめ縄づくり体  
験など、積極的に地域を感じてもら  
えるプログラムも組んでいます。小  
さなまちの魅力を存分に体験したい  
方は、ぜひご一報ください。まちの  
みんなが心よりお待ちしております。



研修医、医学生の  
地域体験  
（自動運転サービス  
実証実験）  
筆者は最後列



医局での地域ケア会議

## 編集後記

『島根の地域医療』第73号をご覧いただきありがとうございました。  
また、お忙しい中にもかかわらず執筆いただいた皆様、ありがとうございました。  
島根県 HP では、令和2年10月1日現在の医療機関の医師募集情報を掲載しています。  
詳しくは、  
<https://www.pref.shimane.lg.jp/medical/kenko/iryoy/ishikakuhotaisaku/isi-kyujin.html>  
または、「島根の医師確保対策」で検索、ご覧ください。